

「没後40年 熊谷守一 生きるよろこび」展

会期二〇一七年十一月一日―二〇一八年三月二十一日 会場 美術館企画展ギャラリー二階

熊谷守一の初期の支援者たち

石崎 尚

人としての生活が成り立って初めて、画家は満足に絵を描くことができる。当たり前すぎることはあるが、熊谷守一が生み出した数々の作品は守一という人間が長い時間を生き延びて、一応は生活を送ることができたからこそ生み出され、鑑賞に供されている。とかく貧乏話に事欠かない守一について、秀子夫人は「モリやわたしの子どもたちが飢え死しなかったのは友情のたまものです」と常々振り返っていたという「註1」。そこで本稿ではその友情の実態について、つまり熊谷守一の生活を支援した人々について紹介することで、守一の制作の裏側にあつた生活の部分に光を当ててみたい。

守一が付知での生活を切り上げて再上京したのが一九一五年。三十五歳の時である。画業の再スタートを促した斎藤豊作は、東京美術学校西洋画科選科とともに学んだ友人であり、実家は味噌製造業を営む裕福な家庭であつた。守一の生活を援助するために始まつた豊作による「おこづかい」は月々四十円ずつ、と決めてもらつていたという「註2」。この「おこづかい」は守一の凶々しさを伝える微笑ましいエピソードだが、これは豊作の渡仏（一九一九―一九二〇年頃）後も継続していたらしく、残されている書簡「註3」を見ると、豊作の兄・益太郎を通じて三〇〇円というまとまった金額の送金がされている。だが、それも一九二五年八月五日の四〇〇円を最後に途絶えている「註4」。この三年前に秀子夫人と結婚し、既に長男と次男のふたりの子どもをもうけていることから、この年に熊谷家の窮乏が本格的に始まつたと考えて良いだろう。守一本人も「なかでも最も困つたのは、一番目の子供ができてから亡くなるまでの四年間でした」と当時を振り返っている「註5」。

四年間というのは、一九二九年に秀子夫人が和歌山に里帰りし、自宅の新築費用を持ち帰ってきたことを指しているのだろう。この時の資金は三千円という大金だったが、

その大半は生活費に消えてしまふ「註6」。また、この年には二科技藝が開設されている。守一はこの研究所で指導するにあつて、車代という名目で月三十円の収入を得ることになる。だが、それもそのまま同額の家賃に消えてしまったようだ。とはいえ、この四年間も二科会への出品は欠かさず行つており、その内の主要な作品は竹添履信「註7」、山本直良、小河清太郎、田村謹壽「註8」、といったコレクターたちの所蔵（一九四二年時点）になつてのことから、その売り上げはある程度の収入にはなつていたと考えられる。

正確にこの時期のことかは定かではないが、いよいよ生活が苦しくなるものの絵が描ける訳でもなく、覚悟を決めて馬車引きになろうと知人を頼つたが、相手にされず首尾に終わつたことがあるようだ「註9」。また、二科会の事務員として働けるように正宗得三郎が気を利かせてくれたこともあつたらしいが、この時は既に雇われている事務員を氣遣つて辞退したという「註10」。どちらも上手く事が運ばなかつたのだが、両方とも何とかして絵を描いて売ろう、という方向性ではないことに留意しよう。売るための絵を描かない事に関して、守一は実に徹底している。

ともかくにも物心両面で支援をしてくれた親友の信時潔や山下新太郎のおかげで、この期間を何とか乗り切つた熊谷家は、わずかながら収入が増えてくる。少しずつ作品が売れるようになったのである。守一と同じく岐阜尋常中学校の同窓生で、眼科医の大野新吉は一九三二年から作品の購入を始めている。また翌年には、《蠟燭》を購入した最初期のコレクターというべき湯沢三千男が広島県知事に着任している。湯沢は《蠟燭》以降も折に触れて作品を入手しているが、加えて守一の絵を知人たちにも広めていたらしく、湯沢がきっかけとなつた購入案件がいくつか見られる。

やがて同様に、単に絵を買うだけでなく、自ら展覧会の企画や販売の斡旋を行うコレクターたちが現れてくる。守一には生涯を通じて交流した音楽関係の人脈があつた。その内のひとり、ヴァイオリニストの川上淳の知り合いであつた兵庫県の江見恒三郎は、関西圏において守一の作品の流通を大いに手助けした人物である。神戸の画廊で守一の展覧会を企画し、自身でも守一作品の購入を重ねているほか、熊谷家の子どもたちに衣服のおさがりなども送つていたという「註11」。そして守一作品の普及という点で極めて重要な役割を果たしたのが、二科会員の画家・濱田葆光である。一九三七年、二科会の主催で「陸軍省と海軍省への献金展」が行われ、その際に濱田に誘われるままに守一は色紙に墨で絵を描いた。この日本画に大きな魅力を感じた濱田はさらなる制作を勧め、自らの住む奈良を中心に大阪や名古屋でも展覧会を開催した。油彩とは異

なりやり直しのきかない日本画の画材は、かえって守一をふつきれさせたようで、油彩とは比較にならないほどのスピードで作品を多産していく。後に「浜田さんにすすめられるし、自分でも面白いので、どんどんかくようになったわけです」と振り返り、それまでの年収五〇〇〇円が三倍の一五〇〇円になり絵で飯が食えるようになったと述べている〔註12〕。これが守一、五十八歳頃のことである。こうして生み出された作品が各地で人目に触れることで、また新しい顧客との出会いが生まれていく。

その中でも最大の支援者が木村定三である。濱田の主催による「熊谷守一新毛筆画展覧会」が一九三八年十二月に名古屋で開催され、これを見て即座に作品に惚れ込んだ木村はその場で三点の作品を購入する。この時、まだ二十五歳の青年だった木村は、その後も守一との交流を通じて作品を買い集めたほか、江見や濱田と同様、作品の普及を目的として名古屋で何度も展覧会を主催し、さらには知人たちをも守一コレクターに仕立て上げるべく「布教」を重ねていく。こうした旺盛な活動はその後、自ら編纂した『熊谷守一作品撰集』の刊行や、守一作品に関する評論の執筆へと発展していく。ここに至って、熊谷家はようやく安定的な収入を手にすることができたのであるが、木村のサポートが生計に関してだけでなく、様々な面でも守一を支えたことは言うまでもない。ちなみに考古遺物から茶道具、近現代美術に至るまで、幅広いコレクションを形成した木村であったが、自らの収集について「熊谷にはじまり熊谷におわる」と述べていることはふたりの強い結びつきを物語っていて興味深い。二〇〇点を超える守一作品を含む約三千三百件のコレクションは二〇〇一年度以降、断続的に愛知県美術館に寄贈され、現在では木村定三コレクションとして公開されている。

さて、守一のもっとも貧しかった一九二五年頃から、どうにか絵で食べていけるようになった一九三八年頃までを駆け足で綴ってきた。何やら『武士の家計簿』ならぬ「熊谷家の家計簿」のような内容になってしまったが、改めて振り返ってみるに、子どもたちを失うという大きな代償を払ったとはいえず、この厳しい時代を乗り越えて彼が九十七歳までの長寿を全うすることが出来たのは、ひとえに守一の作品と人柄に惚れ込み、絵を購入してくれた友人やコレクターたちのおかげであったと思わざるを得ない。有形無形の、実に様々な支援を行っていた彼らを、コレクターではなく支援者と呼びたいのはそのためである。今回の回顧展にも少なくない数の個人コレクションが出品されていたが、展覧会を見た後に是非、彼らの存在にも思いを巡らせてみて欲しい。

ある時、梅原龍三郎の紹介でとあるコレクター宅に絵を売りに行った守一は絵のできを

訊かれ、正直に「あんまりできがよくない」と言ったところ物別れに終わったという〔註13〕。また、江見の知人で著名なコレクターだった山本發次郎は、一九三八―四一年頃に守一と交流し作品を買っていたが、守一が自分のものではなく秀子夫人の前夫の兄・原勝四郎の作品を買うように助言したことで、以降は関係が途絶えている。これらの逸話から考えても、画家と支援者の出会いはまさしく縁によるもの以外の何物でもないだろう。

人生の限られた時間の中で、いかにして制作と生活のバランスを取るべきなのかというジレンマは、今日にあってもなお普遍的な課題としてアーティストを悩ませている。東京美術学校で守一の同級生だった青木繁は、貧困と病の中で早世した。もし青木にも守一のような支援者がいたら、長生きをしてさらに多くの作品を生み出すことができたであろうか。そう考えると守一の画業は、支援者たちの存在と、彼らとの交流を可能にした守一の社交能力によってもたらされたものと言えるだろう。運も実力の内というが、支援したくなるような人柄もまた実力の内ということであるならば、これも画家の制作と生活のあり方をめぐる、ひとつの真実ではある。（愛知県美術館 学芸員）

註

- 1 熊谷樞「熊谷守一もの語り年譜」、熊谷守一「蒼蠅 増補改訂版」求龍堂、二〇一四年、二七五頁。なお、豊作による支援については下記に詳しい。大越久子「初めてのパトロネージュ」『没後三十年 熊谷守一展 天与の色彩 究極のかたち』熊谷守一展実行委員会、一四八一―一五〇頁。
- 2 熊谷樞、前掲書、二六五―二六六頁。
- 3 斎藤益太郎書簡 熊谷守一宛 一九二二年六月一日 岐阜県歴史資料館蔵。
- 4 斎藤益太郎書簡 熊谷守一宛 一九二五年八月五日 岐阜県歴史資料館蔵。
- 5 熊谷守一「へたも絵のうち」日本経済新聞社、一九七二年、一一四頁。
- 6 熊谷樞、前掲書、二七七頁。
- 7 竹添履信書簡 熊谷守一宛 一九二七年一月二五日 岐阜県歴史資料館蔵。
- 8 熊谷守一画集刊行会『熊谷守一画集』一九四二年、九一―一〇頁。
- 9 熊谷守一、前掲書、一九七一年、一一八―一九頁。
- 10 熊谷守一、前掲書、二〇一四年、二四―二五頁。
- 11 熊谷樞、前掲書、二七五頁。
- 12 熊谷守一、前掲書、一九七二年、一三三―一三四頁。
- 13 熊谷守一、前掲書、二〇一四年、二〇七―二〇八頁。